東京のイネ在来品種「実取らず」の埼玉への伝播

戸倉一泰

(埼玉県農林総合研究センター, 熊谷市, 〒360-0831)

Dissemination of Native Rice Variety “Mitorazu” from Tokyo to Saitama Prefecture

Kazuyasu Tokura

(Saitama Prefectural Agriculture and Forestry Research Center, Kumagaya 360-0831, Japan)

**キーワード：イネ，在来種，わら細工，しめ縄，東京，
埼玉，伝播。**

本稿で述べる「実取らず」とは近年まで東京の足立，葛飾，江戸川の3区で栽培されてきた「しめ縄」原料専用のイネ在来種で，穀実生産に使用されないことから「実取らず」と呼ばれる．後述するように本品種にはいくつかの別称があるが，著者が調査・取材した範囲では「実取らず」と言えば本品種を指すと共通に理解されたので本稿では品種名を「実取らず」とした．著者は本品種の調査を通じ，社会・経済的条件によっては穀実生産を目的としない稲作が成立し得ることに驚き，また都市の農業に対する影響の大きさを痛感した．

埼玉県では1985年から1994年まで県内に作付されているイネの在来種等について遺伝資源として収集を行った．収集地域は山間部いもち病常発地帯の秩父を中心としたが収集2年目からは県下全域を対象とした．収集は県内各農業改良普及所の協力を得て実施された．1988年から1989年にかけての収集の結果，県東部平坦地域からしめ縄用品種，わら細工用品種の種子を2点収集できた．それぞれ収集した農業改良普及所からは1点はわら細工用品種とだけあり，1点はしめ縄用品種「江戸川系」の名称とともに元々東京で作付されていたとする私信が添付されていた(野中私信)．普及関係者の間では主にしめ縄に加工される特殊な品種が県内でわずかながら作付があるということが以前から知られていたが，その来歴や特性についてまとめた調査が行われたことはなかったようである．著者は収集した種子を1989年，1990年及び1994年に栽培し，特性調査を実施した結果，本品種の特徴から在来種と判定し，採種を行い品種保存に加えた．その後，本品種には「江戸川系」とは別に「実取らず」という名称があることを知ったが(吉田ら1993)，本品種の来歴や埼玉県への伝播については調査する機会がなく，しばらく調査・研究の進展はなかった．

その後2000年になって東京都農業試験場の馬場氏か

ら本品種についての資料提供と助言をいただき，2001年には本品種を栽培，しめ縄生産に従事した農家から聞き取り調査を行う機会があったことから，資料調査を継続した結果，本品種が埼玉県で作付されるようになった経緯と社会的背景，および品種名の由来について概ね明らかにすることができたので，ここに報告する．

1. しめ縄用品種「実取らず」の品種特性

収集したしめ縄用品種2点について1989年と1990年に系統栽培し，特性調査を行った．その結果，双方とも出穂・稈長についてはかなり分離が認められた．しかし，いずれも穎色が黒，長稈，極晩生で登熟が劣るなどの特性が一致し，これらの特性は古い品種の特徴とされていることから，著者は同一の在来種と判定した．以後の系統維持と特性調査の労力軽減のため代表個体を選抜，分型し純系淘汰を実施した．また試験最終年の1994年にはその他一連の収集品種とともに系統栽培と特性調査を行った．その結果を表1，表2，写真1，及び写真2に示す．本品種は上述した特性の他，金南風より遅く，埼玉県では晩生の晩に属し，脱粒性は難，稈長は120 cm程度の長稈，玄米品質は劣り，葉いもちにも弱いことが判った．また分げつ期までは葉色はやや淡いが出穂期以降は葉色が濃く推移することが観察された．

本品種の長稈で稈が太く，稈質が柔らかく，葉色が濃いという特性はまさにしめ縄加工に向くものと考えられた．

2. 栽培農家からの聞き取り調査

かつて「実取らず」を栽培，しめ縄生産に従事された埼玉県幸手市の大規模農家U氏に対し聞き取り調査を実施した．著者が記録した聞き取りの要旨は以下のとおりである．

聞き取り日：2001年3月1日，聞き取り場所：U氏自宅(幸手市)

1) 「実取らず」の東京から埼玉への伝播時期と経緯

元々東京で作られていたものが埼玉へ入ってきたもので，その時期は「昭和30年代から作付を始めた．多いと

表1. 「実取らず」の生育特性

品種名	収集番号 および 分型系統番号	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	倒伏	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/株)	葉いもち 耐病性 (特性検定)	玄米外観 品質
実取らず	88-4④	9. 4	10.27	3.0	113.6±3.5	19.0±0.8	16.2±2.4	9	6.0
	88-4⑤	9. 2	10.27	4.0	116.5±2.3	20.9±0.8	14.7±2.0	8	5.5
	88-5①	9. 4	10.29	4.0	123.3±6.4	20.3±0.9	15.2±2.5	8	6.5
	88-5②	9. 3	10.29	4.0	127.3±2.9	19.9±0.8	15.3±2.5	8	6.5
金南風		9. 2	10.26	2.5	81.5±3.1	19.1±0.8	17.8±4.7	7	6.5
日本晴		8.24	10.16	1.5	76.5±2.5	19.8±1.5	18.4±3.8	7	4.0

1994年成績, 中苗普通植, 播種日5.20 移植日6.15 栽植密度30×18cm 18.5株/m², 1本植, 1区制系統配置 1区1.1m² 20株×1畦, 施肥: 基肥N・P₂O₅・K₂O各0.3kg/a, 収集時の品種名: 88-4(不明), 88-5江戸川系, 倒伏: 無0微1少2中3多4甚5の6段階評価, 稈長, 穂長, 穂数は平均値±標準偏差(調査10個体), 葉いもち: 0無発病~9全葉枯死の10段階評価, 玄米外観品質: 1上上~5中中~9下下の9段階評価.

図1. 「実取らず」の草姿

写真左から収集番号88-4分型系統④代表株, 収集番号88-4分型系統⑤代表株, 収集番号88-5分型系統①代表株, 収集番号88-5分型系統②代表株, 比較「日本晴」

図2. 「実取らず」の穂

収集番号88-4分型系統④代表株

きは年に20000本くらい『しめ縄』を作った.」としていることから1955年以降(昭和30年代)と推定できた. 東京の具体的地名としては江戸川区の「鹿骨」があげられた.

2)「実取らず」の栽培方法

しめ縄用であることから製品の色が重要で収穫前に追肥を行い葉色を濃くし, 収穫後平型乾燥機で通風乾燥する. 過去1~2ヶ月天日干ししたり, イグサ用乾燥機が使用されたことがあった. 種子は収穫後の再生茎から採種する.

3)「実取らず」で作られたしめ縄の流通

問屋と職人の関係があり, 職人は農家で「実取らず」の栽培からしめ縄作りまで行う. 問屋は年末に浅草寺境内の北側で開かれるしめ縄の市, 「ガサ市」(12月14日~12月25日)で小売りに販売する. 聞き取りでは「しめ縄問屋が20軒くらい出る」, 「問屋1軒が20人くらいの職人を抱えている」と言っていることから職人としての「実取らず」の栽培農家数は問屋数×職人数で約400戸と推定できた. また「東京の連中がやっていて良い金になりそうなのでうらやましかったがなかなか仲間に入れてもらえなかった. やらせてもらっても『場違い』と言って値

表2. 「実取らず」の一般特性

品種名		実取らず	日本晴
項目			
早晚性		晩生の晩	晩生の早
草型		偏穂重	偏穂数
稈	稈長	ごく長	中
	細太	やや太	中
	剛柔	やや柔	中
穂	穂型	紡錘	紡錘
	粒着密度	やや密	やや疎
	穎色	黒	黄白
	護穎色	紅紫	淡黄
	ふ先色	紫	黄白
芒	多少	やや少	極少
	長短	やや短	極短
	芒色	紫	黄白
脱粒性		難	難
糯・梗の別		梗	梗

稲種苗特性分類調査報告書に基づき作成。

段が安く、例えば鹿骨のものと比べ幸手のものは良くて8割くらいにしかならなかった」と言っていることから問屋・職人の関係は固定的、閉鎖的で新規参入は難しかったことが判った。さらに「今では向こうから頼まれるようになったが、忙しくてあまりできない」としていることから現在では職人が不足しており問屋が職人と製品の確保に苦労しているものと推察された。なお「品種名は『みと』、『くろっぽ』とも呼ばれた」としていることから「実取らず」には関係者の間で「みと」、「くろっぽ」という別な呼称・品種名があることも判った。

3. 東京都内における「しめ飾り製造」と「実取らず」栽培

上述したように「実取らず」は元々東京で作られていたものとされていたことから、東京都における「実取らず」栽培の由来について資料調査を実施した。その結果、東京都の江戸川、葛飾、足立の3区の農家にとっては正月用「しめ飾り」製造が農業経営上非常に重要であったため「実取らず栽培」が行われていたこと、正月用「しめ飾り」独特の製造・流通が行われていたこと、元々「実取らず」とは栽培法の名称であったことが判った。

1) 東京都内における「実取らず」栽培の分布

東京都の農業図説(1952)によると江戸川、葛飾、足立の3区とその他区部を東部湿地帯として、都下の水田の60%を占めるが、品種、栽培技術への関心は低く、品種が雑多で奨励品種普及率は低いとしていた。また江東3区の江戸川、葛飾、足立は三多摩に比べ収量水準が低く、第二次大戦はじめまで正月しめ縄用「実取らず」の栽培が盛んに行われていたとし、この地域は都市農村として蔬菜の集約栽培が盛んで、実をとる稲作の経済的価値は極めて低いとしていた。また資料調査の結果、足立

区についてはしめ縄用「実取らず」栽培の農業経営上のウエイトは江戸川区、葛飾区のそれに比べ低く、農家の副業としては「紙漉」の方が重要であったと判断されたので、以下の調査は江戸川区、葛飾区に関する資料によった。

2) 東京都内における「しめ飾り製造」と「実取らず」栽培の歴史

江戸川区においては、「正月用のしめ飾り作り」は住民の信仰や正月行事など生活と密接に結びついた「区内特産物」で(江戸川区1976b)、江戸時代から続き、徳川家・各大名・旗本・商家・芝居小屋などの「しめ飾り」はすべて葛西方面の農家により製造されたとしており、明治以降も引き続き行われ、昭和10年代から逐次減少し、戦後再び復興されたが、以前よりだいぶ減少したとしていた。「しめ飾り」製造には「実取らず」と呼ばれる稲が使われるとしていた(江戸川区1976a)。昭和7年(1932)の区制施行以前の状況について南葛飾郡誌(1923)によると、旧葛西領にあたる南葛飾郡(現葛飾区・江戸川区)では「しめ飾製造」の起源は鹿本村(現鹿骨地区)とその近傍で明治以前から行われていたとしていた。また正月用しめ縄飾原料の栽培は本郡農家の副業として有名で「実取らず」と称して栽培、松江村、瑞江村、鹿本村、奥戸村、南綾瀬村等しめ飾の副業が盛んな町村にあるとし、品種は多くの場合、晩生種で1農家あたり1～3畝作付され、稲わりに青味を帯びさせる必要から日陰田に稲を播種し、土用に刈り取るとしていた。1畝あたり収量は170束であった(南葛飾郡1923)。また鎌形初太郎日記(大正6年7月)においては「南綾瀬の注連飾り」として、「沿革ハ不明ナレ共モ余程古クヨリ製造シ居タルモノナリ。」とされ、しめ飾りの種類として細工物、普通玉、ゴボウ、大根、定輪(じょうわ)があげられ、このうち細工物は明治10年(1877)頃から始めた装飾性の高いもので海老、日の出、積俵等があるとしていた(鎌形1978)。

以上のように、東京都内における「しめ飾り製造」の起源は江戸時代とされ、明治10年(1877)頃には既に地場産業として成立していたものと考えられる。

次に近年の「実取らず」栽培の状況は、江戸川区では1976年時点でしめ縄製造に従事するのは鹿骨～一之江・春江方面の120戸であり、原料の「実取らず」生産は大半近く近県からの買い入れに移行し、以前行われていた小松川町、松江地区、東一之江方面ではしめ縄製造が行われなくなったとしていた(江戸川区1976a)。葛飾区においては1985年時点で、水田がなくなったこと、技術を受け継ぐ人がいなくなったことから区内のしめ飾り作りはほんの数人になり、原料の「わら」は埼玉県や千葉県にある自分の水田で生産するか、埼玉県や千葉県の農家から購入するとしていた(葛飾区1985)。

「実取らず」については、本稿で「実取らず」とした品種と江戸から明治時代にしめ縄原料とされたもの同一か

どうか確認はできなかったが、「実取らず」の名称は南葛飾郡誌(1923)では文脈上から栽培法として、江戸川区史第3巻(1976a)では品種名を指すものと読みとれ、増補葛飾区史下巻(1985)では栽培法として扱われていたことから、元々栽培法の名称であったものが品種名に転訛し現在では本品種を「実取らず」と称するようになったものと考えられた。

3)「しめ飾り製造」および「実取らず」栽培の農業経営上の位置づけ

1983年に葛飾区が旧7カ町村時代からの住民17名(調査当時46歳から81歳)に対し行った面接・聞き取り調査の結果では「しめ飾り作りの話を抜きにして本区の農民の生活史を語ることはできない」ほど重要で、その理由は「昭和10年頃1シーズン平均で70円～80円のもうけがあり、多い家で100円、1家が1年間生活できた」程のまとまった金額を一度に稼げ「農家の年末の副収入としてなくてはならないもの」であったためであるとしていた。しめ飾りが作られたところの土地柄は、土質が野菜作りに不向きであり、逆に野菜作りに向いたところは野菜専業で「しめ飾り作り」ができず、必要性も薄かった。そのため水元・新宿地区では「しめ飾り作り」はほとんどなく、奥戸地区は自家用のみで、しめ飾りの名産地は青戸・砂原(現西亀有地区)であったとしていた(葛飾区1985)。旧南葛飾郡では「実取らず」と称する正月用しめ縄飾原料の栽培は水稻、レンコン、ハナショウブに続く第4の田の作物の地位にあり、1シーズン平均1人あたり100円程度の収入となるため「副業としてかなり重要」で、最も盛んな所は南綾瀬村、亀青村で農家の約50%がしめ飾製作に従事、大正10年調べでは南綾瀬村字堀切では全戸従事、しめ飾製造の同業組合ができていたとしていた(南葛飾郡1923)。また南葛飾郡の北部は乾田であるが、中南部ほど深田が多く、畑の面積は大きくはないが、「東京市相手の蔬菜農の活動地」として極めて集約な耕作が行われ、都市郊外における蔬菜栽培の有利性から、事情の許す限り水田を埋め立て畑地に転換していただいていた。亀青村では小作農が水稻耕作をきらって水田の耕作者を見出せず畑の小作に水田をセットで耕作させることとし、畑だけの小作は小作料を倍額に引き上げたが、それでも小作人は田を捨て畑に就く状況にあるとしていた(南葛飾郡1923)。

以上のように本地域では野菜栽培に比べ水稻栽培の位置づけは低かったため、畑地転換できない地区において穀実生産より収益性の高い「実取らず」が作付けされてきたものと考えられた。

4) しめ縄の流通と同業者組合

増補葛飾区誌下巻(1985)によると、しめ飾りの流通は、しめ飾りの市へ生産者が持参し、市で生産者が仲介に売り、仲介が客に売る、主な客は東京のトビ職、八百屋で

自分の村、町で一般客に売った。しめ飾りの流通には暗黙の統制があり、組合員でないと注文がこない、作っても仲介が買ってくれないというシステムになっていて、組合員は市以外では自分の居住地で売ってもいけないとされた。しめ飾りの市は12月15日の浅草観音裏から始まり神田明神社、次に芝愛宕神社、最後に両国の回向院(大みそか)で終わるとしていた。南葛飾郡誌(1923)によると、大正10年調べでは「注連飾製造に関する同業組合」ができていたとし「これら注連飾は大部分東京の歳の市に売り出され、浅草観音市、神田明神市、芝愛宕市、両国市にもたらされる」としていた。

次に大正6年7月の鎌形初太郎日記「南綾瀬の注連飾り」によると、「販路が面白ク直接ニ市場ヲ設ケ販売スルモノニシテ、直接利益ヲ見ルガ故ナリ」、即ち、自分たちで市を開き直に金になるとしていた(鎌形1978)。

また、南葛飾郡農会史資料第5巻(鎌形1978)には「メ飾親交会規約」も収録されていた。これは「南葛飾郡及び南足立郡メ飾生産者及び仲買者」「大正8年組合組織大正10年規約改正」とあるから南葛飾郡誌の「注連飾製造の同業組合」を指すものと考えられる。本規約は全17ヶ条からなり、「メ飾製造業者及びメ飾仲買業者」を会員(組合員)とすること、出店時の会員章所持義務、「製造人」の市場以外への出荷禁止、組合員以外の市場での取引禁止、各市場での組合員章の検査ほか細部に至るまで取り決めていた。

以上のことから「しめ縄」の流通は同業者組合成立以前は自由であったが、大正8年(1919)以降は同業者間での明確な統制があり、これが時代の経過とともに慣例化して1985年頃においても続いていたことが判った。

4. 「実取らず」の伝承と伝播の特徴

1)「実取らず」の伝承理由

本品種が成立し、今日まで伝承されてきた理由は第1に江戸川・葛飾の両地域が地理・地勢的条件から副業としてのしめ縄製造が農家の生活上必須で地場産業として古くから成立したこと、このため「しめ縄製造に向く特性」という穀実生産とは異なった視点からの品種選択が行われたこと、第2に同業者組合が成立したことにより、閉鎖的な社会関係の中で連綿と伝承されてきたものと考えられた。鎌形勲(1971)は、旧南葛飾郡の農業は日本の他のいかなる土地よりも都市の影響を強烈に受け、都市人口の膨張がそ菜の市場価格の騰貴をもたらした結果、生産費との関連における米とそ菜の市場価格が東京市部の稲作の消長に最も強く関与したと述べている。前述したように、旧南葛飾郡においては畑だけの小作は小作料を倍額に引き上げても小作人は田を捨て畑に就くほど野菜が農業経営上有利であり水稻作の地位は低かった(南葛飾郡1923)。このため深田で野菜栽培の不可能な地域においてはレンコン栽培や「実取らず」によるしめ縄製造が成立・定着し農家の家計を補った、あるいはこれら抜

きでは農家の生計が成り立たなかったものと考えられた。

2)「実取らず」の埼玉県への伝播

馬場(2000)は東京都の水稲について、1955年の8000 haをピークにこれ以降、減少の一途を辿ったとしており、特に1960年～1975年の15年間は7000 haから1000 haへ激減したとしている。また昭和30年代の東京都の水稲は江東3区で50%を占めたが、現在これらの農家の一部は臨県の埼玉、千葉に出耕作するものが見られるとしている。著者は「昭和30年代後半」(1960年頃)から始まった江戸川、葛飾区の農家が埼玉へ出耕作するにあたり、農家の中に「実取らず」を栽培するしめ縄生産者があったものと推定している。これが埼玉の農家と「実取らず」の出会いであったのではなかろうか。埼玉県幸手市の栽培農家U氏が「実取らず」の作付開始は「昭和30年代」としている点や、「東京の連中がやっていて良い金になりそうなのでうらやましかった」「例えば鹿骨のものと比べ、幸手のものは良くて8割くらいにしかならなかった」という聞き取り調査結果、資料調査において葛飾、江戸川両区とも1970年代から1980年代には都市化により水田がなくなったことや、後継者不足により「実取らず」栽培としめ縄作りは衰退し、近県への出耕作や原料の買い入れに移行した(江戸川区1976a, 葛飾区1985)という記述と符丁している。

U氏からの聞き取りでは「しめ縄販売業者」は「問屋」、「しめ縄生産農家」は「職人」としているが、これは「メ飾親交会規約」(鎌形1978)の「仲買者」、「注連縄生産者」にあたる。聞き取りでの「問屋」、「職人」は機能分担であり、「メ飾親交会規約」では常設店舗を持たないという意味からこの「問屋」を「仲買者」としたのであろう。しめ縄の流通については、大正時代からの同業者組合の伝統が現在でも受け継がれていることはU氏からの聞き取り内容にも見られるが、上述した江戸川、葛飾両区の農地・農家の減少によりやむなく埼玉の農家に生産・製造を発注するようになったものと考えられた。

以上のように「実取らず」の埼玉県への伝播は、これまで知られている他の在来イネ品種の作付地域拡大とは異なり、元の栽培地域の都市化、農地・農家の減少という経済情勢や社会変化による周辺地域への拡散であった。なお「実取らず」の現状における分布については、吉田ら(1993)は本品種の種子を茨城県農業試験場から分譲を受けており、埼玉県東部から茨城県霞ヶ浦周辺にかけて分布しているとしている(吉田私信)。また著者は1997年に埼玉県北部の熊谷市で、2001年にやはり埼玉県北部の行田市で自家用と思われる「実取らず」の作付けを認めており、本品種は農家間の種子流通により分布を広げているものと思われる。

3)「実取らず」の栽培史が示すもの

これまで述べたように食糧増産が国是とされた時代にあっても「実取らず」は根強く作付されてきた。東京の葛飾区、江戸川区という限定された地域ではあるが、この事実は「イネを作付ける」という行為の目的が農家の経済と生計にあることを示していて、条件次第では穀実を生産しない稲作すら成立し得る事実を示している。このことを裏返せば農家の生計を基軸とし、地域の地理・地勢、経済的条件を踏まえたものでない限りどのような品種や技術も定着し得ないということを著者は改めて認識した。

本品種の栽培は東京の都市の発展とともに明治から大正時代にかけて隆盛を迎えたが、やがて都市化により周辺地域へ拡散し、元の栽培地から消滅するという歴史を辿った。この「実取らず」の栽培史は、「都市と農村は調和し得るか」という大きな課題に一つの答えを出してしまっていた。しかしながら著者は一方で出耕作による営農継続を選択した農家があったことに注目している。なぜ彼らは出耕作までして営農の継続を選択したのか、この検討はもはや育種学研究の範疇を離れるが、著者はここに都市と農業の新たな関係構築に向けたヒントが見いだせないかと考えている。

謝 辞

「実取らず」の収集にご協力いただいた元春日部農業改良普及所野中修一氏、元久喜農業改良普及所古澤孝行氏、聞き取り調査にご協力いただいた幸手市農家U氏ならびに資料調査にご助言いただいた東京都農業試験場馬場隆氏に深くお礼申し上げます。

引用文献

- 馬場 隆(2000)日本作物学会関東支部会報15: 6-7.
 江戸川区(1976a)“江戸川区史第3巻”江戸川区, 東京. 67-70.
 江戸川区(1976b)“江戸川区史第3巻”江戸川区, 東京. 360-361.
 鎌形初太郎(1978)“南葛飾郡農会史資料第5巻”鎌形勲浄書複製本, 東京. 1094-1097.
 鎌形 勲(1971)“南葛飾郡農会史資料第1巻”鎌形初太郎編(1977), 鎌形勲浄書複製本, 東京. 序文1-6.
 農林水産情報協会(1980)稲種苗特性分類調査報告書: 1-112.
 東京府南葛飾郡(1923)“南葛飾郡誌”日本郡誌集成(1973), 明治文献, 東京. 336-380.
 東京都葛飾区(1985)“増補葛飾区史下巻”ぎょうせい, 東京. 482-485.
 東京都農業試験場(1952)“東京都の農業図説”東京都農業試験場, 東京. 58.
 吉田宣夫・武政安一・高橋哲二・増山忠良(1993)日草誌39(3): 359-363.